

## 『エマ』：ジェイン・オースティンによる最も幸福な喜劇

*Emma* : The Happiest Comedy by Jane Austen

入 野 賀和子

Kawako Irino

ジェイン・オースティンの『エマ』が、1815年12月（タイトルページの出版年は1816年と印刷されている）、世に送り出されたとき、彼女の周りの人々の反応にはそれ以前に出版された『自負と偏見』（1813）や『マンスフィールド・パーク』（1814）とは微妙に異なるものがあった。「彼女（オースティン）はエマが大好きだったが、エマが誰にでも好かれる存在とは思っていなかった。というのもその作品を書き始めた頃、彼女は『私以外の人は誰もあまり好きになれそうにない女主人公を取り上げるつもりです』と言っていたからだ」と、彼女の甥がその伝記に書き残しているように、<sup>(1)</sup>オースティンは彼女の新しい女主人公がどのような印象を読者に与えるかということに、いささか危惧の念を抱いていたようである。それは次のような、姉のカサンドラに書き送った手紙の中のエリザベス・ベネットに関する浮き浮きするような威勢のよい調子の一節と比べてみても明らかである。「私は彼女（エリザベス）のことを、これまで出版されたものに登場するどの人物にも負けないほど楽しく好ましい人物だと思っていることを認めます。彼女のことを嫌いだなどと言う人をどのように我慢したらよいのか、私にはわかりません。」<sup>(2)</sup>彼女の予想通り彼女の家族や友人、知人たちの『エマ』に対する評価は分かれ、『エマ』よりも前二作品を好む、もしくは『エマ』の良さを認めない意見を述べている割合が圧倒的に高かった。<sup>(3)</sup>もちろんこのようなオースティン周辺の人々の『エマ』に対する反応が、当時の読者全般にも当てはまると言うことはできないが、少なくとも一般読者の評価の一端を窺い知ることができる。「『自負と偏見』を好む読者にはウイットが足りないように思われ、『マンスフィールド・パーク』を好む人達には良識という点で物足りなさを感じるだろうという思いが頭から離れません」と、オースティンは『エマ』を献呈することになった摂政官の、御用邸図書館長に書き送っているが、<sup>(4)</sup>確かに彼女は第四作目にあたる『エマ』でそれまでの良識から言えば、かなり大胆とも思われるような女主人公を世に送り出したことになるかもしれない。

女主人公エマはエリザベス・ベネットとほぼ同年齢の21歳で、この作品も『自負と偏見』と同じく適齢期の娘の夫捜しがテーマになっている。エリザベスと同様、エマも健康そのもので、才気に富む渾身とした女主人公である。しかしオースティンの他のどの女主人公とも違っているのは、エマの絶対的な経済的優位性である。キャサリン・モーランド、ファニー・プライス、エリザベス・ベネットといったオースティンの他の女主人公たちの結婚は、いずれも彼女たちを生まれ育った環境から引き上げる、いわゆる「結婚による出世」物語の様相を呈している。もちろんエマの場合も、同じように「結婚によるさらなる出世」願望を実現するような物語にすることもできたであろう。しかしオースティンは、エマを最初からそれまでの女主人公たち

の到達点とも言えるような恵まれた境遇に置いている。三万ポンドの持参金のついた一人娘も同然のエマが経験する世界は、同じ地主階級に属しながらわずか一千ポンドの持参金しか持たず、しかも五人姉妹の中で揉まれているエリザベスが体験する世界とはおのずから異なったものになってくるのは当然のことであろう。結婚が女性の経済的自立と密接に関わっていた時代にあって、もうすでに快適な住まい、全てを思い通りにできる経済力、病弱で無能な父親に代わってすべてに采配を振るう一家の中心的存在としての権威を手にし、ある面では経済的自立を達成している女性を主人公にすることにより、オースティンはひと味違った結婚話を作り出している。「自分以外の人は誰もあまり好きになれそうにない女主人公」エマを通してオースティンは、女性の自立と結婚との関わりについてかなり大胆な取り上げ方をしているように思われる。

1

「何千という人達の運命でもあるさ、子供の頃はいやらしくても、大きくなるにつれて直っていくものだよ」<sup>(5)</sup>と、ナイトリー氏は婚約者となったエマを前に、甘やかされた子供時代のエマを愛しそうに思い出す。この作品は、まさに甘やかされて育った生意気そのもののエマの物語である。

エマ・ウッドハウスは美人で才気煥発、裕福で、暖かな家庭と朗らかな性質を持ち生活の最上の恵みのかずかずを一身に集めているように見え、この世に生を受けてから二十一年ほどになるが、これまで苦しみや悩みといったものにはほとんど縁がなかった。

これ以上望むべくもないほど恵まれた女主人公の登場である。しかしこの軽快な書き出しのすぐ後に、母親代わりでもあった愛情溢れる温和な家庭教師のミス・テイラーの指導にもかかわらず、エマは「自分の好きなように振舞い、ミス・テイラーの判断力を高く買ってはいたが、たいていは自分自身の判断に従って行動していた」と続く。オースティンは印象深く簡潔な書き出しでその作品の主題と基調を提示するのが大変巧みな作家である。この作品においても、この軽やかな書き出し部分に水をさすかのようにさらに次の様な一節が書き加えられる。「実はエマの境遇がもたらす真の弊害と言えるものは、あまりにも自分の思い通りにできる力を持っていることと、自分自身をいささか過大評価する性質だった。」<sup>(4)</sup> 自分の娘に欠点があることなど思いもよらず、何事であれ娘が一番だと信じて疑わない父親、聡明ではあるがエマを束縛するよりは、エマの意向を第一とするような家庭教師の元で、エマはすっかり甘やかされて育つ。しかし家庭の中の女王様と言うだけでは、エマの生意気ぶりも大した弊害には成り得ない。エマの自信過剰の裏付けとなっているのは、ウッドハウス家の社会的地位であり、その経済力である。

ハイベリーは、ほとんど町と言ってもいいくらい大きくて人口も多い村で、ハートフィールドも芝地や灌木林や名称は独立して別れているようでありながら、実際にはこのハイベリーに属していたのだが、そこには彼女と同等といえる人はひとりもいなかった。ウッドハウス家はそこでは一番の家柄で、だれもがこの一家を崇めていた。<sup>(5)</sup>

ウッドハウス家のエマは、富裕さゆえに一目置かれる存在となっている。固定化した階級社会の中では、資産があることがその人物の欠点を斟酌するある種の免罪符のような役割を果たしていることもまた事実である。この作品の倫理的基準を体現する人物とされているナイトリー氏でさえも、善良なベイツ嬢を侮辱する態度を取ったエマを諭す言葉の中にそのような階級意識をのぞかせている。「もし彼女が裕福ならば、彼女の中でばかげた滑稽さが時折善良さよりも幅をきかせることがあっても僕は決して気にもしないだろう。もし彼女に財産があれば、無害な愚かさがどう働こうと成り行き任せにしておくだろうし、あなたがどんな無礼なまねをしても、あなたと口論したりしないだろう。」(339) もちろんナイトリー氏の言わんとすることは、金持ち階級の愚かさを容認することではなく、社会的弱者への心遣いの必要性をエマに伝えようとしているのだが、にもかかわらず彼の言葉の背後には、富裕階級に属する人々の欠点に対する社会全般のある種の斟酌的態度が潜んでいる。オースティンがエマをそのような富裕階級の娘にしたのも、エマがこれまでの女主人公では描ききれなかったかなり率直な、そして少々刺のある内容を取り込もうとしたのではないだろうか。さらに言えば、エマにかなり思い切ったことを言わせて、しかもそれが全くの妄言としてではなく一面の真理を含む言葉として受け止められるには、どうしてもエマを富裕階級の娘にする必要があったのである。またオースティン自身、大胆で歯に衣着せぬエマの発言に重ねるようにこれまでの作品以上に自由に率直に彼女の主張を織り込みつつ、しかも笑いの中に潜む毒の量も少々多目に盛り込んで、欠点の多い生意気なエマの背後に隠れることが可能になるわけであり、同時に世の非難もかわせるという二重の利点があると言える。

『エマ』は結婚そのものに焦点を合わせた作品である。物語は16年間も家庭教師として共に暮らしてきたミス・テイラーが隣人のウェストン氏と結婚するところから始まる。この結婚は、エマにとって永遠に続くかと思われた父親と家庭教師とエマとの静かで安定していた生活の終わりを意味し、エマは自分の生活の再構築を迫られることになる。この変化は明らかに姉のイザベラが7年前に結婚したときとは全く違う意味合いをもってくる。結婚適齢期に達しているエマは、それまでの呑気な少女時代を引きずっているような生活から精神的自立への大きな試練に直面することになるのである。その試練はまた、ハイペリーという狭い限定された社会で自らの優位性を脅かされるような競争相手もなく、わずかばかりの経験をもとに世間を知ったつもりになっている独り善がりの現実感覚に乏しい娘が、現実の社会に暮らす様々な背景を背負った生身の人間と交わりながら、片寄った観念的理解からより成熟した現実的理解へと実社会に対する認識を軌道修正していく過程と言い換えることができよう。しかしこの時点でのエマの反応は、結婚をまだひとつの目新しい「事件」ほどにしか考えていない。ミス・テイラーの結婚はエマに生活上の大きな変化をもたらすが、エマは結婚をいまだ現実感をもって捉えることができない。従ってエマがハリエットのために次々と考え出す縁組みは、蓋然性を無視したエマの思いつきの産物であり、自作の物語の登場人物を扱うかのようにハリエットを弄ぶ残酷さが感じられるのである。

「若い農夫など馬に乗っていようといまいと、私の興味を引くことなど有り得ないわ、自作農なんて私とは全く関係のない階級の人達よ」(25) とまで言い切る階級意識の固まりのようなエマが、出自のはっきりしないハリエットを友として選んだ理由自体、エマの的外れで硬直した想像力を物語っている。ハリエットを出生の秘密をもつ立派な家柄の娘と思い込むエマの想像力は、ゴシック小説にのめり込むキャサリン・モーランドの想像力に通ずるものがある。

しかしエマにはキャサリンの稚拙ではあるが全身で反応するような強烈で自然な想像力は無縁である。エマの想像力は、ハリエットを淑女に相応しく作り変えるという、エマの虚栄心を大いに刺激する計画に沿うかたちで働かされるからである。出自不明の美しい娘が実は貴族の娘であったという筋立ては、18世紀の小説では常套的なものであるが、まさにエマはそのような小説を読むかのようにハリエットを扱っている。ハリエットは農夫などと結婚して身を落としてはならないのである。人間を観念的にしか捉えていないエマには、ハリエットのマーティンへの密かな想いなど一時の気の迷いでしかない。現実感が欠如したエマの考えつく縁組みは、社会的条件の釣り合いのみが先行する言わばデータ結婚のようなものであり、人間性に関するはなはだしい洞察力の欠如が次々と思ひ違い、思惑違いを引き起こすことになる。エマはハリエットの頭から農夫を追ひ払うために牧師のエルトン氏に狙いをつけ、ハリエットを牧師館の女主人におさまらせる計画に熱中する。

彼女はすでに彼（エルトン）がハリエットを美しい娘だと思っていると確信していたが、ハートフィールドであれだけ頻繁に出会っているのだから、このことは彼の側でも十分基礎が出来上がっていることの証拠になると思えた。またハリエットにしても彼に好かれていたという思いは、よくあることだが十分に重みと効き目を持つであろうことはほとんど疑いの余地はなかった。それに彼は、実際とても感じのいい青年で、よほど気難しくない限り女性なら誰でも好きになりそうな青年だった。彼は大そうな美男子だと見做され、容姿も大体においてほめそやされていた。もっとも彼女自身は別で、彼女にとっては絶対不可欠な顔立ちの優雅さが欠けていた。しかし自分のために胡桃を取りに田舎を馬で駆け回るロバート・マーティンのような男で満足できる娘が、エルトン氏の賛美によって征服されることは十分有り得ることだろう。(30-31)

かなりいい気な言い分ではあるが、同時に憎めないおかしさがある。『エマ』の成功は、様々な欠点にもかかわらず主人公のエマにどれだけ読者が共感を覚えることができるかどうかにかかっている。そのためには読者との共犯関係の確立が是非とも必要であり、オースティンはエマの視点に限りなく寄り添いエマと読者との距離をかなり縮めながら、しかもエマの欠点や限界をもからかい笑い合うという、主観的であると同時に客観的な視点の設定が要求される。この微妙なバランスの上にあってこそ、エマを笑いつつ実は読者自身にもその笑いが振り向けられているという、幾重にも重なり合った共犯関係が成立することになるのである。

エマは物質的にも精神的にも現状に満足し、その現状維持が大前提になっているために、彼女の発想もその狭い現状認識の域をでない。そのために彼女の口をついて出る言葉はどうしても独り善がりなものになりがちである。

「私にはふつうの女の人のように結婚する必要性がないのよ。まあ、私が恋にでも落ちれば、事情は違ってくるでしょうけど。でも私はこれまで恋をしたことは一度もないわ、私向きじゃないし、私らしくないわよ、これからだってないと思うわ。それに恋もしてないのに今の境遇を変えるなんて、私はとんでもないお馬鹿さんてことになるわ。財産を必要としているわけではなし、することだって沢山あるし、社会的地位も欲しくないわ。結婚している女の人で、私がハートフィールドの女主人であるその半分も夫の家で女主人然

としていられる人はほとんどいないと思うの。こんなにも心から愛され大切にされ、私がお父様の目に写っているように、どんな人の目にもいつも一番でいつも正しく写ることなど、とっても考えられないことだわ。」(77)

この自分の未来に関する自信満々の態度は、現在の幸福で安定した生活がいかなるものによっても脅かされることはないという確信からきている。心の平安を乱されたことのないエマは、余裕をもってハリエットの恋愛を激励できるわけである。

これまで恋をしたことがないと言い切るエマの口から語られる結婚に関する女性の側からの反論は、幾分観念的で独り善がりの傾向はあるが、すべてたわいないエマの思い込みとして片付けてしまうのは性急すぎるように思われる。エマを通してオースティンの本音も漏れ聞こえてくるようである。エマがマーティンとハリエットの縁組みを壊したことで、ナイトリー氏とエマが口論する場面がある。綺麗で気立てのいいだけの取り立てて何の取り柄もない娘には過ぎた縁組みだと言うナイトリー氏に、エマは次のように答える。

「…あなたがおっしゃるように、彼女がただ綺麗で気立てがいいだけだとしても、言わせていただきますがそういうものを彼女ほど持っているとするれば、世間一般にはそういったものの持つ魅力は決して取るに足りないものではありませんわ。実際彼女はとても綺麗ですし、百人中九十九人までがそう思うに違いありませんわ。それに男性が美の問題について、今よりももっとずっと賢明に考えられるようになったと思われるようになるまで、そして彼等が美しい顔ではなく、博識ある精神に恋をするようになるまでは、ハリエットのような美しさを持つ娘は賛美され追いかけて、大勢の男性の中から思いのままに選ぶというのは当然のことですし、またそれだから要求も厳しいものになるのですわ。」(57)

そしてさらに「彼女が17歳で、人生に足を踏み出したばかりで、やっと人に知られ出したばかりだと言うのに、初めて受けた結婚申込みを承諾しないからといって、不思議がられるなんてことがあっていいものなのでしょうか。いいえ、違うわ、どうか彼女に周りを見まわす時間を持たせてやって下さい」(57)とナイトリー氏に反論する。庶出のハリエットにとっては自作農であるマーティンとの結婚でさえ望外の幸せだとするナイトリー氏の論拠には疑いを挟む余地はない。しかしエマの反論には自己正当化とともに、結婚市場における女性の選択の自由が極端なまでに制限されている状況下で、若さと美しさだけが商品価値のあるものとして扱われることへの鬱屈した気分が込められていることもまた事実である。生意気なエマはオースティンの本音と願望の表出手段でもある。そしてエマ自身は、結婚市場でのそのような女性が置かれた不利な状況を物ともせず、エルトン氏相手に見事なまで完璧に、そして痛快に拒絶の権利を行使する。

エルトン氏の日当てがエマであることに当人だけが気付かないという喜劇的状况は、これまた最高に喜劇的な結末を迎える。読者にはエルトン氏の自己中心的な俗物ぶりは十分伝えられ、彼の愛情の対象はエマというよりエマの財産に向けられていることは明白なので、エルトン氏からの結婚申込みに対するエマの屈辱とハリエットの結婚相手と見做されたエルトン氏の屈辱のぶつかり合いを、読者は痛快な思いで楽しむことができるわけである。「才能や精神の高尚さにおいて、彼がどれだけ私よりも劣っているかを彼に感じるよう期待するのはおそらく公正

なことではないのだろう。そういった対等な資質が欠けているからこそ彼には認識できないのかもしれないけれど、財産や社会的地位において私のほうが遥かに勝っていることを彼はわきまえているべきよ」(123)と、エマの憤慨はなかなか収まらない。不運なハリエットへの気遣いだけがエマをしばし反省へと導くが、強靱な精神力と快活な性質を持つエマの立ち直りの早さもまた見事である。「ハリエットをお手本にするほうが、才能や知性によるよりも自分の幸福にはもっと役に立つのではないか」(128)と殊勝に考えるが、「単純で無知であろうと試みるには遅すぎる年齢」(128)に達しているとの自覚のあるエマが、17歳のハリエットの天真爛漫な無邪気さに戻れるはずはなく、またエマ自身も「単純さと無知」は「才能と知性」に勝るなどと思うはずもなく、彼女の知的優越性への自負心は何ら影響を受けていないことは明白である。

## 2

結婚する必要性のないエマにとって、フランク・チャーチルは格好の擬似恋愛の対象になる。フランク本人が出現する以前に、エマの頭の中ではもうすでに一つの先入観が生まれている。「もし結婚するとすれば、年齢や性格、身分の点で彼こそ自分に相応しい人だった。両家のこのつながりから言っても、彼はもうすっかり自分のもののように思われた。」(107)ハリエットの夫選びの場合と同様、優先されるのは外的条件である。結婚する意志はなくても、周りの友人たちからは似合いの二人と思われることにはある種満足を感じるエマと、秘密に交わした婚約を隠したいフランクの思惑が一致して威勢のよい恋愛ゲームが展開される。しかし知的優越性が自慢のエマがフランクとの擬似恋愛においても、常に自分の側からの見方でしか物事を捉えることができないために、エマの想像力は途方もないほうへと働いていく。振り返ってエマは自らの想像力過多を戒めるような言葉を発するが、エマの想像力もしくは空想力は過剰と称する類のものなのであろうか。むしろ余りにも硬直した先入観に捕らえられ、逆に想像力の欠如こそがエマの数々の悲喜劇を引き起こしたのではないだろうか。

エマはフランクへの感情を様々に分析してみせる。「彼は私に愛していると言ったようなものだわ。」「そうはならないと前から決めていたけど、私も多少は彼を愛しているに違いないわ。」「確かにそうだわ、このように物憂く、倦怠感があり、ぼうっとする感じ、腰を下ろして仕事などしたくない気持ち、このように家中の何もかもが退屈で気の抜けたような気持ち、そうよ、私は恋をしてるに違いないわ。」(236)かとおもうと「私は犠牲という言葉を使っていないわ、空想の中での私の気のきいた返答や思いやりと気遣いのこもった拒絶のどこにも、犠牲になるということをほのめかすような言葉は入っていないわね。本当は私の幸福には彼は必要ではない、ということじゃないかしら。」(237)エマの分析は止どまる所を知らない。しかし彼女はフランクが二週間の滞在を終えて立ち去った後、全てが物憂く虚ろだと言いながら、翌日にはもういつもの快活さが戻っている。「拒絶」を前提のエマの擬似恋愛は、所詮彼女の心の問題ではなく頭の中だけの作り事である。従ってエマの反応は彼女の頭の中に入り込んでいる言わば恋愛教本に則った、型通りの陳腐なものでしかない。17歳のキャサリン・モーランドの無邪気な想像力は、自然で素朴な愛情表現を損なうことはなかった。逆にエマは自らの想像力過多を戒めるような振りをしながら実は意識的に楽しんでいる。しかしキャサリンの想像力に比べると、エマの想像力はいかにも借り物といった感じで、陳腐で硬直した印象を与える。キャサ

リンの想像力はいかに的外れなものであらうと、その柔軟さと自然さが彼女をより成熟した段階へと導く働きをしていた。ところがエマは、ゴシック小説を読み耽ったキャサリンのパロディの如く、彼女の頭の中にはまるで二流の恋愛小説が詰まっているかのように陳腐な反応と解釈を繰り返す。エマ自身の自然で独自の想像力ではなく、借り物の貧しい想像力である。美貌と教養を備えたジェイン・フェアファックスとその引き立て役のような親友のミス・キャンベル、しかもあれだけ望んでいたミス・キャンベルの嫁ぎ先のアイルランド訪問を辞退までしての突然のハイベリーへの帰郷、このような断片的な情報だけでたちまちのうちにジェインとミス・キャンベルの夫となったディクスン氏との不倫の恋の存在までも作り出してしまうエマの想像力は、ハリエットのための夫選びの場合同様、荒唐無稽なロマンスが詰め込まれた二流の小説さながらに、いかにも硬直した陳腐なものとの印象を与える。しかもそれら全てはエマの身勝手な願望に沿う形で発揮されるために、周りを巻き込んでの影響力ははなはだ甚大である。そして結局フランクに対する気持ちも次のように決着をつける。「この問題をあらゆる点から考えてみて、要するに私の幸せがこれ以上巻き込まれることはないと思うと有り難いことだわ、しばらくすれば私はまたうまくやっていけるわ。そうすればこれで良かったことになるのよ、だって人は誰でも一生に一度は恋をするということらしいから、私はたやすく放免されたことになるわけですね。」(238) エマは自信たっぷりに自分自身の気持ちまでも片付けてしまう。

エマの頭の中ではフランクは失恋の痛手を被る運命にあるのだが、早くも彼の幸福のためにエマはハリエットと結び付けようとする計画を立て始める。そして二つの事件が相前後して起こり、その結果エマは大打撃を受けることになるわけである。この事件のうちの一方は、オースティンの作品には珍しいピカレスク的要素に彩られた事件である。ハリエットが散歩途中にジブシーに取り囲まれ金品を脅し取られそうになったまさにその時、折よく通りかかったフランクに助け出されるというものである。エマにとってこれ以上ロマンチックな事件が考えられるであろうか。彼女の頭の中では瞬く間にハリエットとフランクの運命による結び付きが完成する。

このような事件、立派な青年と美しい若い女性がこのように偶然に巡り合わせたという事件は、この上なく冷静な心とこの上なく落ち着いてしっかりとした頭を持った人にも、ある考えを思いつかせないではないだろう。少なくともエマはそう思った。言語学者でも、文法学者でも、数学者でも彼女が見たものを見て、彼等二人が一緒に現れたところを目の当たりにし、その話を聞くことができたとすれば、彼等をお互い特別に関心を持たせるように状況が働いていると感じたのではないだろうか。まして彼女のような空想家なら、どんなにか思惑と見込みで夢中になったことだろう。特に彼女の心がすでに抱いていたような予感が下地としてあった場合には。(301-02)

そしてそれからまもなくハリエットは密かな愛情の告白をするが、相手の名前を明かさなくともそれがフランクであることはエマには疑う余地はない。エマはハリエットの趣味が洗練されてきたことを誉め、これよりもっと身分違いの結婚もあるとハリエットに希望を抱かせる。

しかしオースティンは大変巧妙にもう一つの事件を用意していた。それはジブシーの事件とは全く趣を異にするものであった。ジブシーの一件の前日、ハイベリーでは珍しく大掛かりな

舞踏会が開かれたが、そこでハリエットは新婚のエルトン氏から悪意に満ちた扱いを受ける。17歳のハリエットにとって、目の前でこれみよがしに踊りのパートナーを拒絶されることは耐え難い屈辱であり、それを救ってくれたのがナイトリー氏であった。エマはエルトン氏がエマへの腹いせに、その悪意を社会的弱者のハリエットに向けていることを十分承知しており、顔が紅潮するほどの怒りを覚える。そしてそれまで全く踊りに参加する素振りを見せなかったナイトリー氏がハリエットの手を取って進み出るとき、改めて彼の思いやりあふれる行為に感謝する。しかしエマにとっては、ナイトリー氏の取った行動はいかにも彼らしい行為であり、彼がそのように思いやりのある人物であることはエマには当り前すぎて、今さら改めて認識を新たにすべき性質のものではない。ところが翌日の事件は、「彼女の記憶では、この土地のどんな若い女性にも起こったことがない」(302) 異常な事件なのである。彼女はその事件の目新しさにすっかり夢中になる。ハリエットが「その救助への感謝の気持ちを大変熱心に語り、彼が助けに来てくれるのを見たときどんなに強く感動したかまでも話した」(368) とき、この「救助」の意味をエマは完全に取り違える。エマにとって「救助」は文字通り物理的な救助の意味にしか解釈できない。キャサリン・モーランドが体験するゴシック小説の恐怖は、日常生活に潜む恐怖とは全く性質の違うものであり、日常生活で遭遇する恐怖のほうが遥かに悪意に満ちていることがあることを認識しなければならないように、エマもただ身体的に安全に解放されることと、精神的な苦痛からの解放とは明らかに意味合いが違うことを体得しなければならない。しかしジプシー事件の扱い方は、当時の流行小説へのパロディ的要素をもつ『ノーサンガー寺院』と比較するとからかいの調子がかすかなものになっており、簡単に処理されてしまう。オースティンは『エマ』において、二つの全く性質を異にする事件を対比させながら、人間の心が生み出す苦悩や葛藤が、単に華々しい尋常ならざる事件よりもより深い劇的状況を生み出し得ることを実証しようとしているように思われる。

エマはその限りなく恵まれた状況に安住しきって、改めて問い直すこともなく現在のこの状態が不変であると思い込んでいる。エマの強気と自信は、いわば人間の弱さからくる苦悩や葛藤を経験したことのない人間のもつ強気と自信であり、時に他の人の心の痛みに対する鈍感さからそれが残酷に働くことがあるが、また一面、傷ついたことのない人間が放つ夏の眩しさのような健康な輝きに満ちた魅力を持っていることも事実である。オースティンがエマに用意した自己認識の過程は、この恵まれた状況がいかに周りの人々の愛情を基にして成り立っていたか、そしてエマ自身がそのような愛情を当然の如く受け取り、余りに恵まれ過ぎていかに愛情に鈍感になっていたかを認識するという、喪失の危機による認識の形を取る。失いそうになって初めてエマはナイトリー氏が自分の幸福の大前提としてなくてはならない存在だと気付く。ウェストン夫人がジェイン・フェアファックスとナイトリー氏の結婚の可能性をエマに示唆したとき、あれほどまでにナイトリー氏は結婚するつもりなどないし、彼が結婚するなど考えられないと強い調子で異議を唱えたその本当の理由に初めて思い至るのである。エマがナイトリー氏への愛を認識する言葉は、率直なエマに相応しく驚くほど明快である。

エマはさっと目をそらした、そしてじっと座ったまま二、三分黙って考え込んでいた。彼女が自分の心を知るには、二、三分で十分だった。彼女のような知性はいったん理解し始めると急速な進歩を見せる。彼女はありのままの真実に触れ、受け入れ、認めた。ハリエットがナイトリー氏に恋することが、フランク・チャーチルに恋するよりもどうしてそ



んなにひどいことなのか。ハリエットが彼から愛情のお返しを受けたと希望を持つことが、どうしてそれほどまでに弊害を大きくすることになるのだろう。ナイトリー氏は私以外の誰とも結婚してはならないという思いが矢のような速さで彼女の中を駆け抜けた。  
(369-70、傍点筆者)

エマの試練は無自覚に享受していたものの喪失の危機という形で訪れる。恵まれ過ぎたエマの自己認識は、オースティンの他の女主人公たちとは違い、すでに手に入れていたものの価値の再確認の過程を通して行われる。生意気なエマは、彼女自身が勝手に作り上げていた滑稽な高みから降りてきて、地上にしっかりと足をつける。そしてエマはその試練の報奨として突如ナイトリー氏からの求愛を受ける。

「僕はうまく話などできない、エマ」——彼はまもなくまた話し始めた。それは誠実で、きっぱりとして、疑いの余地を残さないほど愛情のこもった口調で、納得させるには十分であった——「もし僕があなたをこれほどまでに愛していなければ、もっとそのことについて話すこともできるだろう。しかしあなたは僕がどんな人間かご存じだ。僕の口から語られるのは、真実だけです。僕はあなたを非難し、説教してきたが、あなたはイングランドの他のどの女性にも真似のできないほどに、それに耐えてきました。これから僕が話そうとしている真実に、愛しいエマ、これまでと同様立派に耐えてください。」(390)

しかしナイトリー氏のこの言葉は、どうみても求愛というより、これから何か不吉な悪い知らせが告げられようとしているかのようなものである。この風変わりな求愛は、ブライズが述べているように「昔ながらの騎士物語の裏返し」のようであり、<sup>(6)</sup>夫を得るためにその倫理性が試されなければならないのはエマの方である。エマが「ナイトリー氏は私以外の誰とも結婚してはならない」とまで言明し、エマの試練の褒美としてナイトリー氏が与えられるなど、『エマ』は女性の側からの高らかな結婚謳歌の作品になっている。さらにまたエマの父親への心遣いから、夫となるナイトリー氏がエマの屋敷に移り住むというおまけまで付いている。エマはオースティンの作品の中でも、最も欠点の多い女主人公である。しかしオースティンは欠点多き女主人公の形を取りながら、その欠点を積極的に利用してしたたかに女性の主体的な生き方を描き出してみせたのではないだろうか。裕福なエマの設定は、エマの言動を斟酌させ、また女性の側からの精一杯の主張を織り込むための必要不可欠な要素であったと思われる。

### 3

オースティンは『エマ』創作中に、小説を試みていた姪に当ててあの有名な創作上の助言を書き送っている。その「田舎の村の三、四家族が小説に取り組むのに相応しい題材です」<sup>(7)</sup>という言葉通り、オースティンは『エマ』の舞台をハイベリー村に設定し、主人公のエマはここから外の世界へ出ることはない。しかしまたオースティンの作品の中でこの作品ほど村の共同体の暮らしぶりが生き生きと、そして詳細に描き出されているものはなく、また舞台が限定されているにもかかわらず、この村に出入りする人々を通してさらにロンドン、ブリストル近辺、ヨークシャーといった外の世界との繋がりを実感させてくれるものは他にない。『エマ』のも

う一方の主人公はハイベリー村であると言ってもよく、エマの自己認識の過程にはエマが生まれ育った共同体との関係の再認識が要求されているのである。言い換えれば、エマがウッドハウス家の娘という漠とした存在から、エマ・ウッドハウスという明確な個性と顔をもつ独立した一人の人間へと成長していくためには、エマが自らの境遇の再構築を必要としたように、共同体の一員としてエマと共同体との関係の再構築が必要とされるのである。『エマ』は頭の中で作り上げていた現実社会に対する勝手な思い込みから覚醒し、地に足をつけてその社会へ参入していく若い女性の成長物語とも言えるのである。

家庭教師のミス・テイラーの結婚後にエマが味わう「知的孤独」は、とりもなおさずハイベリーに社会的地位においても、知性においても、エマの対等な話し相手がいないことを示している。そのような狭い共同体の中で、エマほどの利発さと気概を持った娘がいささか自信過剰に陥ったとしても無理もないことと言えよう。『エマ』はオースティンの他のどの作品にもまして、若い澆刺とした魂が閉塞した共同体の中で苦しんでいる痛々しさが伝わってくる。

…ハイベリーが一番賑やかな場所でさえ、そこの人通りからは大したことは望めなかった。忙しそうに通り過ぎていくペリー氏、事務所の入口ではウィリアム・コックス氏が中に入ろうとしている、運動から戻ってきたコール氏の馬車馬、強情な騾馬に乗ってぶらついている郵便配達少年、彼女（エマ）が期待できる目を引くものといったら精々これぐらいだった。だからお盆を持った肉屋や、籠に一杯詰め込んで店から家へ帰っていくこざっぱりとした老婆、汚い骨を奪い合っている二匹の野良犬や、パン屋の小さな張出し窓からショウが入りケーキに目をやりながらのらくら過ごす子供たちの一群しか目に止まらなくても、彼女には不平を言う理由はなかったし、十分面白がりながら戸口にじっと立っていた。快活で気楽な心はつまらないものでも見ればそれだけで満足するし、また見ればそれなりに手応えはあるものなのだ。(209-10)

これはハイベリーでも流行の先端をいくフォード服地店でのエマの描写である。エマは特別なことは何も起こらない同じことの繰り返しの毎日に満足していると言うが、かえってエマの好奇心旺盛な精神が息苦しいほどの閉塞感を抱いていることを浮かび上がらせている。このように固定され、「誰も移り住むこともできず、付き合いの範囲を実質的に変えることもできず、お互いが顔を合わせながら何とかうまくやっていかなければならない」(129)のような共同体では、エマとハリエットとエルトン氏の場合のようにいささか具合の悪い状況が起こっても、何事もなかったかのような顔をして耐えていくしかないのである。

しかしこのように固定化された共同体の中で対等な競争相手のいない状況は、エマの自信過剰をいささか滑稽なほどの高みへと彼女自身を祭り上げることになる。エマの独り善がりな思い込みを描くオースティンの語調はからかいに満ちている。ハイベリー村で一番の名家を自認するエマ・ウッドハウスが、商売で成功した言わば「成り上がり者」のコール家から晩餐会の招待を受けたときの場面では、大げさな表現が多用されエマの滑稽な階級意識が思いきりからかいの対象になっている。エマはコール家が旧家の人々を招待するという不遜さに憤慨する。

「コール家の人々はそれなりにきちんとしていたが、身分の高い家族に訪問してもらう場合にはまずお伺いを立てるべきで、自分たちの側で勝手に手筈を整えてはならないことを教えてやるべきだが、この教訓を彼等に与えるのは自分以外にはいないだろう」(186)と息巻くが、い

ざその「侮辱」が加えられると最初の決意とは裏腹にエマの親しい知人たちも招かれていることもあり、あっさりと「威厳ある孤立」の状態を捨て招待に応ずることになる。そしてコール家で十分に敬意を表され、またささやかながら舞踏会の真似事も味わえたことに気を良くし、身を落として訪問したことを後悔するどころか、すぐには消えぬ名声を後に残したと満足感に浸るのである。つまりエマの自認する高みとは、あくまで彼女自身の頭の中で作り出された思い込みの産物に過ぎず、若々しく柔軟なエマの感情は簡単にそのような型通りの硬直した思い込みを裏切ってしまうのである。そしてまたエマの独り善がりの思い込みは現実感覚欠如の産物であり、実際に現実社会に触れることにより矯正されていくべき類のものなのである。

さらにエマの自信過剰は外の世界から新しく人がハイペリーに入ってくることにより、つまり比較の対象ができることで揺らぎを生ずることになる。その意味でジェイン・フェアファックスとエルトン夫人は、エマの自己認識の過程になくてはならない存在である。エマとは正反対に財産の後ろ楯を持たないジェインは、家庭教師として生活の糧を得なければならない境遇にある。家庭教師に必要な教養と才芸を身につけるための系統だった教育を受けたジェインは、能力はあっても勤勉さに欠け全て中途半端な程度にしか学んでこなかったエマにとっては十分彼女の自信を脅かし得る存在である。同年齢の幼馴染みでありながら心のうちを明かさず打ち解けないジェインに、エマは彼女の境遇に同情を感じながらも常に批判的態度を取るが、その気持ちの背後にはジェインがエマの優位性を脅かす競走相手という意識が隠されている。エマにとっての価値判断の基準となるナイトリー氏がジェインの長所を並べ立てながらも、ジェインが率直さに欠けると指摘するとき、エマは完璧と思われているジェインにも欠点があると知り、内心満足を感じたりするのである。しかしまたエマは音楽の才能に関して、ジェインの優位性を率直に認めるだけの寛大さと鷹揚さも持ち合わせている。良識、知性、教養どの点をとってもエマと同じ、いやエマ以上のものを備えながら、ジェインは読者の共感という面では常にエマの背後に追いやられてしまう。欠点が多く独り善がりの思い込みから自信たっぷりの振舞いの目立つエマと比べた場合、決して自分自身を表に出すことのないジェインは、その寡黙で無個性なまでの自己主張の無さゆえにかえって存在感が薄れてしまう。もちろん筋の展開上ジェインの婚約を秘密にしておくためにジェインの言動を謎めいたものにする必要があったとしても、彼女の慎ましやかな用心深い振舞いをオースティンは読者の共感を呼ぶようには取り扱っていないことは明らかである。一見冷静に見えるジェインもフランクの懇願に負け秘密裏に婚約を結んでしまう情熱も持ち合わせているわけであるが、慎ましやかなジェインを秘密の婚約という女性の美德の基準からは外れた行動に走らせることにより、オースティンはジェインを率直なエマとは正反対に、慎ましきの背後に隠すべき秘密をもつ負の面を背負う人物として仕立てている。『エマ』においてオースティンは、女性の美德の一つとされた慎ましきよりも女性の率直な自己主張を全面に押し立て、評価する姿勢を示しているように思われる。その意味でジェインはエマの知的優位性を脅かしエマが客観的に自己を見つめるきっかけを与えるが、本質的にエマを脅かす存在には成り得ない人物である。

ジェインがエマの知的優位性を脅かす人物とすると、エルトン夫人は何事においても常に脚光を浴びる存在でいたいという自己顕示欲でエマの優位性にとって代わろうとする人物である。エルトン夫人はエマから生来の善良さ、率直さや寛大さなどを全て取り払ったような、言わばエマのパロディ的人物である。エマはエルトン夫人の俗物ぶりを槍玉にあげるが、エルトン夫人はエマの嫌悪する商売の成功によってのしあがってきた新興階級に属する人物である。

脈々とその地位を保ってきた地主階級を脅かす、勢いを増しつつある新興階級という図式そのままに、エルトン夫人はエマとはまた違った意味での迫力と自信でエマに脅威を与え、ハイベリーに君臨しようとする。狭い固定化された様に見えるハイベリーの村にも少しずつ変化は訪れているわけで、エマも好むと好まざるとにかかわらずそのような変化を受け入れざるを得ない。フランクやジェイン、エルトン夫人といった人達に促されるように、エマの社交生活の範囲は広がりを見せ始める。晩餐会、舞踏会、苺摘み、ボックス・ヒルへの遠足といった社交生活を通して、エマの現実社会との繋がりが増えてゆき、それとともに彼女のハイベリー村の住人への認識も変化を見せ始める。際限無く続くおしゃべりに辟易し、ベイツ嬢を訪問することは時間の浪費とまで言い切っていたエマも、ナイトリー氏がエマの冷淡さを責めたこともあり、最初は儀礼的にはあるが彼女を受け入れる努力を始め、貧しい境遇へと追いやられてしまっているベイツ嬢への思いやりを徐々にではあるが持つに至るエマの変化に、エマの成長が重なり合っているのである。コール家に対する場合と同様、実際に生身の人間と触れ合うことにより、エマが頭の中で作り上げていた現実社会への勝手な思い込みが軌道修正され、地に足をつけて共同体の一員としてその中に溶け込もうとする姿勢へと変わっていく。フランクがハイベリーやその住人のことを誉めちぎるのを耳にして、「エマは今までこの土地を余りに軽蔑し過ぎていたのではないだろうか、と感じ始めたほどだった」(198)とオースティンはフランクのお世辞に乗せられそうになっているエマをからかっているが、この作品でオースティンは子供から大人への成長過程で自らが育った環境及び社会との関係の再認識、再構築の必要性を取り上げているように思われる。

前にも述べたようにオースティンの作品の中で、この作品ほど主人公が住む村の共同体の様子が詳しく描出されたものはない。農業経営者のナイトリー氏、ロンドンの弁護士であるジョン・ナイトリー、土地を買って商売から引退したウェストン氏、元家庭教師のウェストン夫人、牧師のエルトン氏、薬剤師のペリー氏、学校経営者のゴダード夫人、牧師だった父親のわずかばかりの遺産で細々と暮らすベイツ嬢、自作農のマーチン、ゴダード夫人の学校の寄宿生のハリエットといったように様々な階級や職業の人間が登場する。さらにまたウッドハウス家の御者のジェイムズ、ナイトリー家に仕えるウィリアム・ラーキンズや家政婦のホッジズのような使用人たちの言動までもが生き生きと伝えられ、彼等の存在がしっかりと印象付けられる。そしてこのような使用人たちよりもさらに底辺にいる貧しい人々の暮らしがあり、またこの社会から締め出された放浪するジプシーの団も存在する。

そしてこの作品に登場する話題や描写は女子のための学校から郵便制度まで多岐に亘り、さりげない社会批評も含まれている。例えばゴダード夫人の学校は、「新しい原理と新しい方式に基づいて一般教養的な才芸と優雅な徳性とが結び付けられ、また多額のお金を払って若い女性たちが健康を搾り取られ、虚栄へと追いやられる」(18) ような学校ではなく、健康な土地に建てられ健康な食べ物もふんだんに与えられ、「手頃な値段で手頃な量の才芸が売られ…天才となって帰ってくる心配のない」旧式な寄宿学校である。後にシャーロット・ブロンテが『ジェイン・エア』(1847)の中で展開する当時の学校の悲惨な状況に対する激烈な批判と比べれば、いかにもオースティンらしい穏やかな皮肉に満ちた社会批評であると言える。あるいはまた、ジェイン・フェアファックスが家庭教師の状況について話題にする場面がある。物静かなジェインが口にする「人間の肉体ではなく人間の知性を売る」(271) という「家庭教師売買」の表現は、奴隷売買を連想させジェインには珍しく痛烈な響きを持っている。さらにまたエマ

が貧しい村人を見舞う箇所がある。彼等はエマの助言と財布の両方から救済を受け、またエマの慈善に対する考え方も大変現実的である。エマは「彼等の癖を理解し、彼等の無知や誘惑の多さを斟酌して考えることができ、教育がほとんど何の役にも立たなかったそれらの人々から途方もない美德を期待するなどという非現実的な考えは持っていなかった」(79)とあるように、エマに代表される富裕階級の現実的な慈善行為が描かれる。

オースティンは時に語り手を通して、時にエマやジェインといった登場人物の口を通して、彼女の他のどの作品にも増して社会そのものを広く描き出そうとしている。『エマ』はその舞台が狭いハイベリー村に限定され、目覚ましい筋の展開もなく、ほとんどが会話という構成になっている。しかしその空間上の狭さにもかかわらず、この作品は主人公を取り巻く社会が明確に描き込まれることにより、大きな広がりがある作品の中に持ち込まれている。全てにおいて一番であることを望んだ傲慢なまでのエマの自己過信からの覚醒は、現実社会に対する認識を伴ってこそ可能になるのである。言い換えればエマの自己認識は自己と社会との関係の再構築を経て初めて完成するものなのである。『エマ』はオースティンが一貫して追求している若い女性の自己認識による成長という主題を、社会の一員としての女性の、社会への積極的参入という面から描き上げた作品と言えるのではないだろうか。

しかし『エマ』はあくまでも軽快で、威勢のよい喜劇である。ナイトリー氏を失うかもしれない苦しみで、エマは吹き荒れる嵐の音を聞きながら苦悶の一夜を過ごす、翌日には再び暖かで輝かしい夏が戻ってきたように、エマの苦悩もナイトリー氏からの突然の求愛という思いがけない解決を見る。また見当違いな激励を与えさらに傷つけることになったハリエットに対しても、「いくらハリエットだからといっても、一年に三人以上の男性に恋をすることも有り得るだろうと望むのはあまりと言うべきだろう」(409)と心痛めていたエマも、突然のハリエットとマーチンの婚約の報に心の重荷から解放されて小躍りする。

…彼女はこれ以上何を望むことがあるだろうか。その意図や判断がいつも彼女よりずっと優れていた彼（ナイトリー）にもっと相応しい存在になりたいということだけである。彼女の過去の愚行からの教訓が将来彼女に謙虚さと慎重さを教えてくれるであろうということの他には望むことは何もなかった。

彼女の感謝と決意は大変真剣であり、心からのものだったが、それでも時々そういった気持ちの真っ最中に笑いを押さえることはできなかった。そのような結末には笑わないではいられない。五週間前の悲しい失望がこんなふうな終わりを迎えるなんて！ なんていう心、なんていうハリエット！（432）

『エマ』は高らかな笑い声が響き渡る、幸福感に満ちあふれた作品と言えよう。

注

- (1) Austen-Leigh, James Edward. *Memoir of Jane Austen*. London : Century Hutchinson Ltd., 1987, P. 157
- (2) Austen, Jane. *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*, ed. Chapman, R. W., Oxford University Press, 2nd ed., 1969, P. 297, No. 76. カサンドラ・オースティン宛、1813年1月29日
- (3) Austen, Jane. *The Works of Jane Austen, Vol. VI, Minor Works*, ed. Chapman, R. W., Oxford University Press, 1988, PP. 436-39  
ジェイン・オースティンにより集められたり、書き写された『エマ』に関する友人、知人41名分の感想を読むと、『エマ』を積極的に評価している者が3分の1、『エマ』よりも『自負と偏見』もしくは『マンスフィールド・パーク』の方を好む者が3分の1、前二作品よりも『エマ』の方が劣る、あるいは『エマ』を好まないという意見を持つ者が3分の1という割合に分けられるようである。
- (4) Austen, Jane. *Letters. op. cit.*, P. 443, No. 120. J. S. クラーク宛、1815年12月11日
- (5) Austen, Jane. *Emma*. Oxford University Press, 1984, P.419. 以下このテキストからの引用はページ数のみを記す。
- (6) Blythe, Ronald. "Introduction to *Emma*" in *Emma*. Penguin Books, 1980, P. 29
- (7) Austen, Jane. *Letters. op. cit.*, P. 401, No. 100. アナ・オースティン宛、1814年9月9日